

自由図書の部 次点

小林倭慈さん 文学部英語英米文学科1年

『ラノベのなかの現代日本 ポップ/ぼっち/ノスタルジア』
波戸岡景太著 / 講談社

「非日常と日常の両面印刷」

本書の著者である波戸岡景太氏は、慶應義塾大学大学院後期博士課程を修了後、現在の明治大学理工学部総合文化教室准教授の立場に身を置いている。しかし、専門は理系から連想される数字とはほど遠く、現代アメリカ文学を専門としている。そして、『ピンチョンの動物園』のような現代アメリカ文学者の作品への考察や『コンテンツ批評に未来はあるか』というデータベース化された社会から現代の人間と社会との関係性を紐解いている。すなわち、現代社会およびそれに関連する現代日本に通暁している人物である。そのような表象に長けた著者が、ラブコメや魔法世界などの非日常を描写した作品の数々を考察する。

近年、アニメや漫画が若年層の娯楽として浸透している。さらに、それを中心にコミックマーケットや漫画喫茶、コスプレのような独自の日本文化として処理されている。また、それらに現実的な考えは存在せず、理想的な事象を掲げている。実際に、世界においてもハリーポッターやマーベルという現実では未だ不可能とされる物語を展開している。だから、背景に現代社会的な要素が隠れているとは鑑みることが出来ないだろう。それに相反して、著者は独自の見解でラノベの著者が意図したかも不明瞭な事柄を解体しているのである。

この作品は、ラノベを軽視している大人の世代に向けて書かれている。若年層向けに描かれている幼稚な物語展開の中で如何に大人向けの思考回路を見いだすことが出来るか、という点で論を展開している。現代の大人に属する昭和世代が、社会の縮図として無意識に見ていたドラえもんから乖離し、ポップ且つ可愛い絵柄のものに変更することを促す。つまり、ラノベの中に点在する気持ち悪い部分を見せている。

例えば、『俺の彼女と幼なじみが修羅場すぎる』という典型的なハーレムものを挙げている。主人公の黒歴史である中二病を理解し、受け入れていく為に四人のヒロインが「乙女の会」という共同戦線を作り上げる場面である。普段から対局的で混じることのないヒロインたちが、互いに共通する「好きな人」の為に結束するというのだ。この点に関して、著者は「いまだ世界支配をなし得た国はないという、ポスト冷戦期ならではの現実認識を共有しているのである」(122)とこのラノベ読者からすると何の変哲もない場面をポスト冷戦期という現実の思想を投影している。

けれども、一ラノベ読者の見解では、この場面は微笑ましい集まりと考えられる。また、モテる主人公への羨望があるのだ。著者の考えは、学術的な要素があり、教養を得ら

れる部分も多々ある。しかし、理想を描いている媒体に対して、このような見解を持ち込むことに理想の崩壊を招いている。だが、人間の産物である架空世界も所詮、人間の思考の一線に過ぎないのであると思い知らされたという点も忘れてはならない。

したがって、この作品は、ラノベの本質を探るものである。また、人間は完全なる隔離された世界を創造することは適わないとも提言されているように感じる。それは、ラノベの背後に現代日本が身を潜めているということである。ラノベという書籍には、非日常と日常の真逆の存在が記されているとした作品である。それから、前述した大人世代に向けてだけでなく、子供世代にも見解の幅を拡張させる機会を与える作品である。